

仙台市文化財調査報告書第39集

燕 沢 遺 跡

—発掘調査報告書—

1982年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第39集

燕 沢 遺 跡

—発掘調査報告書—

1982年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序

燕沢遺跡は、縄文土器や古代の古瓦を散布する所として、古くから仙台市史や学界の報文によって周知されてきた遺跡であります。今回の本事業は、土地所有者日野氏による開発計画の中請が提出されたため、両者慎重な協議を行い、事前調査という記録保存の措置を講ずるに至った事業であります。

本調査は昭和56年4月～6月迄の3ヶ月を要しましたが、その結果古代の掘立柱建物跡、溝跡、土塙等の貴重な遺構を中心に古瓦や土器の検出をみると至り、陸奥国分寺跡と多賀城を結ぶ線上にあるという地理的位置にあって、古代に於ける何んらかの國家的施設が存在する可能性をひめた重要な遺跡であることが報告されています。

もともと仙台市の北東部に展開する台ノ原・小山原丘陵は七北田川右岸で、その先端部が舌状の形状を成して沖積地へ張り出していますが、これらの丘陵上には陸奥国分寺や多賀城へ供給するための古代瓦窯跡群が存在し、また、その先端部には本遺跡をはじめ菖蒲沢遺跡、笠森城跡、小鶴城跡などもあって、附近一帯は、古代から中世にかけての歴史的風土を形づくっている地域であります。

この報告書は燕沢遺跡の調査成果をまとめたものであります。本遺跡の調査や整理、報告書刊行に当っては土地所有者日野氏をはじめ多くの方々の御協力を仰ぎながら完結することができました。ここに心から感謝の意を表する次第であります。本書が文化財保護や学界の資料として多くの方々に御活用を願うものであります。

昭和57年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤 井 黎

例　　言

1. 本書は、宅地造成工事に伴う燕沢遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書の作成に際して進藤秋輝・高野芳宏・白鳥良一（宮城県多賀城跡調査研究所）、平川南（東北歴史資料館）各氏の御助言をいただいた。
3. 本書の文章・実測図中の方位は真北で統一してある。
4. 本書に掲載した地図は国土地理院発行の5万分の1「仙台」を使用したものである。
5. 本書中の土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）を使用した。
6. 本報告の執筆・編集は渡部弘美が担当し、一部遺物等の整理・実測に学生諸氏等の協力をいただいた。
7. 本遺跡の出土遺物は仙台市教育委員会が一括保管している。

本文目次

I.	調査による経過	1
II.	遺跡の位置と環境	1
1. 地理的環境	1	
2. 歴史的環境	1	
III.	燕泥遺跡について	3
IV.	調査の方法と経過	7
V.	調査概要	7
1. 基本層位	7	
2. 発見遺構と出土遺物	8	
3. 出土遺物について	13	
VI.	考察	25
1. 出土遺物の年代	25	
2. 遺構の性格と年代	26	
3. 遺跡の性格	26	
VII.	まとめ	27

図・図版・表目次

図1	遺跡の位置と周辺の遺跡	2	図13	出土遺物Ⅱ（平瓦4類）	17
図2	遺跡周辺の地形	4	図14	出土遺物Ⅲ（平瓦4類）	18
図3	遺構配置	5・6	図15	出土遺物Ⅳ（平瓦4・5類）	19
図4	基本層位	7	図16	出土遺物Ⅴ（丸瓦1・2類）	20
図5	1号掘立柱建物跡	8	図17	出土遺物Ⅵ（丸瓦2～4類）	21
図6	2号掘立柱建物跡	9	図18	出土遺物Ⅶ（土師器・須恵器）	22
図7	3号掘立柱建物跡	10	図19	出土遺物Ⅷ（須恵器・石製品）	23
図8	1号土壤遺物出土状況	11	図版1・2	遺跡周辺航空写真	31
図9	2・3・5号土壤断面	11	図版3～5	遺構配置	32
図10	溝跡断面	12	図版6	1号掘立柱建物跡	33
図11	溝状遺構断面	13	図版7	2号掘立柱建物跡	33
図12	出土遺物Ⅰ（平瓦1～3類）	16	図版8	3号掘立柱建物跡	33

図版 9	3号掘立・柱穴断面	34	図版15	平瓦4類	37
図版10	3号掘立・柱穴内瓦検出状況	34	図版16	丸瓦1~4類	38
図版11・12	1号土壤・遺物検出状況	34・35	図版17	土器類・陶器類・石製類	39
図版13	1号溝	35	表1	出土遺物集成	24
図版14	平瓦1~3・5類	36	表2	掲載出土遺物観察表	40

調査要項

遺跡名称 燕沢遺跡（仙台市文化財登録番号C-101）

所在地 仙台市燕沢東三丁目12

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

担当職員 試掘調査 結城慎一・工藤哲司

本調査 渡部弘美・長島栄一

調査期間 試掘調査 昭和55年6月9日

本調査 昭和56年4月14日~昭和56年6月19日

調査対象面積 1100m²（調査面積720m²）

調査協力者 日野はつね

調査参加者 相沢林三郎・相沢勇・石森留吉・遠藤長吉・佐藤徳右二門・高野褒藏・永野正
武田勇之助・横田要七・真中信三・横手一彦・藤沢美智・前田芳枝・本橋憲子

整理参加者 浅野静子・原田ふみ子・佐々木弥生・松本寿一・芳賀英実・池田俊也・只野宗一
宮本昌俊・鈴木勝彦・大野亨・佐藤淳・大和田晶子・斎藤三重子・田村ゆかり

I 調査に至る経過

燕沢遺跡（仙台市文化財登録番号C-101）は仙台市北部を東西に延びる台ノ原・小田原丘陵の東端に位置しており、古くより布目瓦や土器が出土する所として知られてきた。

遺跡の所在する当丘陵は近年急速に宅地化が進み大小の開地群もみられ、遺跡地内も宅地化が進みつつある。昭和55年、仙台市燕沢東三丁目12において宅地造成が計画され、地権者 日野はつね氏より開発行為事前協議書が提出された。開発申請地は遺跡の中央部にあたる場所でもあり、仙台市教育委員会は試掘調査を実施することにした。その結果、掘立柱跡や溝跡が確認され、再度の協議により開発部分の事前調査を行なうことにして、昭和56年4月14日より記録保存を目的とした調査を実施した。

II 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

燕沢遺跡は東北本線東仙台駅より北東約2kmの地点、仙台市燕沢東三丁目・岩切字山崎西に所在する。

遺跡周辺の地形を概観すると、奥羽山地から東へ延びる富谷・七北田（仙台市東部においては台ノ原・小田原丘陵の呼称がある）丘陵が張り出しており、両丘陵を七北田川が東流しながら開析し、平野部において梅田川を合流し太平洋に注いでいる。当河川は両岸に河岸段丘を発達させ丘陵面に要害地形を形づくっている。又、丘陵端より太平洋に向けて広大な面積の沖積平野を形成せしめ、河川周辺には自然堤防の地形もみられる。

遺跡は台ノ原・小田原丘陵東端部、七北田川右岸の標高20~30m程の段丘上に立地する。平野部との比高差は10~20m程である。遺跡の範囲は東西250m、南北200m程の広がりが考えられ、立地は南側において急傾斜面の要害地形、北側では緩斜面となっており、北側と西側では小河川が開析した谷地形がみられ、あたかも独立丘陵の様相を呈する。このように立地としては平坦面が少なく緩斜面に遺跡の広がりをもつという特徴がみられる。

2. 歴史的環境

燕沢遺跡周辺は良好な地理的環境から数多くの遺跡が分布している。特に両丘陵南側部と七北田川周辺に集中する。遺跡周辺では古墳時代以前の遺構が確認されておらず不明な点も多いが、それ以後の遺跡は種類・数とも多くみられる。

古墳時代の遺跡としては七北田川の自然堤防上に立地する鴻ノ巣遺跡・新田遺跡がある。古墳時代前・中期の遺物が出土しており、古墳時代でも早い時期から七北田川周辺は生活の場と

図1 通路の位置と周辺の道路



しての利用がみられたようである。両丘陵墓には善應寺・東光寺・入生沢等の横穴墓がみられる。又、台ノ原・小田原丘陵東部においては初期須恵器生産窯の大蓮寺窯跡がある。

奈良時代になると、陸奥国の国府である多賀城や陸奥國分寺・同尼寺が造営され、それらに供給される瓦・土器等の生産が台ノ原・小田原丘陵上で開始されている。現在確認されている窯跡の数は18群にものぼり、一大窯跡群が形成されていたことがうかがえる。

中世の遺跡では七北川を南流する要衝の地に高森城（岩切城）がある。これは陸奥國府留守職に補任された伊沢（留守）家景が構えた館である。菩提寺である東光寺には磨崖仏や板碑が多数みられる。又、数多くの居館が周辺にみられ、中世における要衝の地であったことがうかがわれる。

このように燕沢遺跡周辺は古くは古墳時代から連續と続く多くの遺跡で構成されている。

III 燕沢遺跡について

燕沢遺跡は台地東側平坦部において繩文土器や石器も採集されており繩文時代から平安時代にかけての複合遺跡として知られていたが、特に古瓦が散布することで注意されていた。

これらのことから遺跡についての論者もいくつみられる。故石田茂作氏は「仏教の初期文化」において燕澤寺という名称で遺跡を取り上げており、国分寺建立の関連の中で奈良時代寺院としての性格を与えていた。燕澤寺自体の説明はなく詳細は不明である。伊東信雄氏は仙台市史等の中で「燕澤古瓦出土地」として取り上げている。出土した重弁蓮華文軒丸瓦や土師器からみて平安時代初期のものとし、遺跡の性格については不明としている。しかし、遺跡の立地する地理的・歴史的環境などから國家的施設の存在を示唆している。又、故内藤政恒氏は「仙台市台ノ原・小田原瓦窯跡群と出土の古瓦」の中で燕沢遺跡と小田原案内の瓦窯址を密接

1. 燕 沢 遺 跡 C-101	16. 堀 下 遺 跡 C-218	33. 南 日 城 跡 C-510
2. 千 人 墓 古 漢 C-005	17. 出 花 遺 跡 C-176	34. 小 鶴 城 跡 C-509
3. 山 崎 沖 遺 跡 C-292	18. 高 柳 B 遺 跡 C-174	35. 善 应 寺 横 穴 群 C-027
4. 菖 蒲 沢 追 跡 C-141	19. 高 柳 A 遺 跡 C-173	36. 大 莲 寺 罂 茎 距 C-415
5. 笹 森 城 跡 C-512	20. 竹 ノ 内 遺 跡 C-178	37. 安 豊 寺 中 四 窓 跡 C-410
6. 北 知 遺 跡 C-237	21. 和 田 磐 乳 断 遺 跡 C-523	38. 安 豊 寺 配 水 場 遺 跡 C-411
7. 大 正 例 遺 跡 C-220	22. 牛 小 金 遺 跡 C-183	39. 安 豊 寺 下 罂 茎 距 C-412
8. 岩 切 城 中 遺 跡 C-221	23. 山 母 神 里 敷 遺 跡 C-524	40. 桜 江 遺 跡 C-433
9. 高 森 城 跡 C-502	24. 福 田 町 遺 跡 C-223	41. 土 手 前 罂 茎 距 C-414
10. 東 光 寺 横 六 群 C-032	25. 鶴 巻 I 遺 跡 C-224	42. 神 明 社 罂 茎 遺 跡 C-408
東 光 寺 等 城 跡 C-508	26. 鶴 巻 II 遺 跡 C-225	43. 神 明 社 裏 遺 跡 C-172
東 光 寺 古 砧・磨崖 仏 C-602	27. 小 原 遺 跡 C-227	44. 二 ノ 森 罂 茎 遺 跡 C-109
11. 鴻 ノ 墓 追 跡 C-135	28. 明 月 墓 敷 遺 跡 C-231	45. 二 兵衛 沼 泽 遺 跡 C-407
12. 新 山 遺 跡	29. 北 墓 敷 遺 跡 C-168	46. 庚 申 前 罂 茎 距 C-106
13. 山 王 遺 跡	30. 陸 奥 國 分 寺 遺 跡 C-419	47. 南 光 沢 泽 遺 跡 C-405
14. 市 川 城 遺 跡	31. 陸 奥 國 分 尼 寺 遺 跡 C-420	48. 小 田 原 長 命 坂 遺 跡 C-404
15. 多 賀 城 跡	32. 国 分 横 鏡 遺 跡 C-511	49. 五 本 松 罂 茎 距 C-403

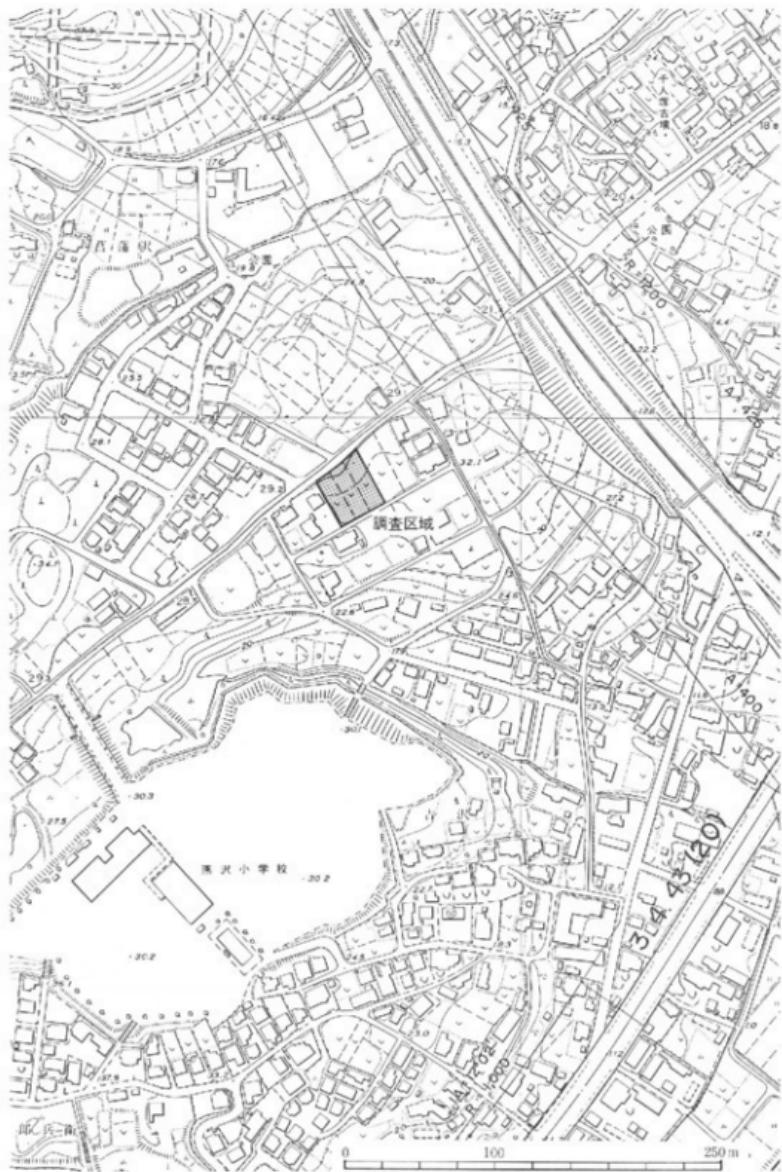


図2 遺跡周辺の地形



図3 遺構配置

な関係をもつものとして取り上げており、窯跡群の性格と供給先との関連について言及している。その記述の中に古手の瓦についての説明があり、燕沢遺跡上限年代に関する大きな問題を提示されている。
(註3)

このように燕沢遺跡は寺院か官衙としての性格が述べられ、年代に関する点についてもいくつかの論考がなされ、その後の踏査・研究において新資料もみられ今日に至っている。
(註4)

IV 調査の方法と経過

今回、提出された開発予定地は遺跡の中央部西側にあたる、標高31~32mのゆるやかに北側へ傾斜をみる地点である。開発面積は約1,100m²で、堆土等を考慮した約720m²の調査を行なった。

調査区設定は土地境界杭を基準とし、南北（真北線から西へ約32°偏する）に基準線を設け6mを単位としたグリッドを設定した。グリッド名は南北軸にアルファベット文字・東西軸に算用数字を用いた名称を使用した。

調査は表土層全面を重機で排除し、遺構確認を進めていった。表土層は地形的な条件もあり非常に薄く、トレンチ南側では10cm程の掘り下げで遺構確認面となっている。検出された遺構には掘立柱建物跡・土壙・溝跡・溝状遺構・ピット等がある。遺構の配置に関して、トレンチ北側に溝跡・ピットが集中し、南側に掘立柱建物跡が集中する特徴がみられた。実測方法は平板測量を基本とし、一部の遺構については簡易の遺方測量を用いた。

調査も終了に近づいた6月6日には現地で説明会を開催し、調査は6月19日に終了した。

V 調査概要

1. 基本層位

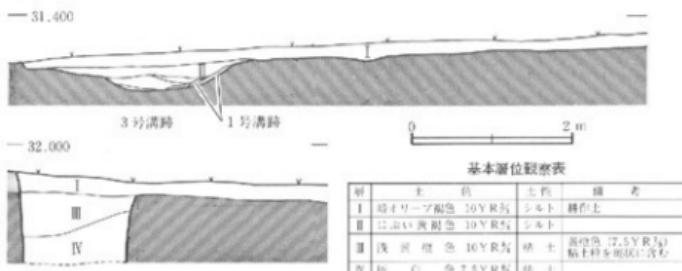


図4 基本層位

調査区内の地山までの基本層位は三層に分けられる。第Ⅰ層：耕作土である。暗オリーブ褐色のシルト層で厚さ10~30cm程である。出土遺物には土師器・須恵器・瓦・陶磁器等がある。第Ⅱ層：にぼい黄褐色のシルト層である。厚さ10~15cm程で、調査区北側のみに分布している。出土遺物には土師器・須恵器・瓦等がある。第Ⅲ層：浅黄橙色の粘土層（地山）である。全ての遺構は第Ⅲ層面で確認された。

2. 発見遺構と出土遺物

検出された古代の遺構は掘立柱建物跡3棟、掘立柱跡1基、土壙4基、溝跡5条、溝状遺構1基、大小のピット130余である。他に現代の溝跡・土壤が確認された。

(1)掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 調査区外へ一部延びるため不明な点もあるが、桁行3間、梁行3間の方形棟の建物跡と考えられる。柱穴の配列から北側に廊をもつ建物とも考えうるが、柱列の規模

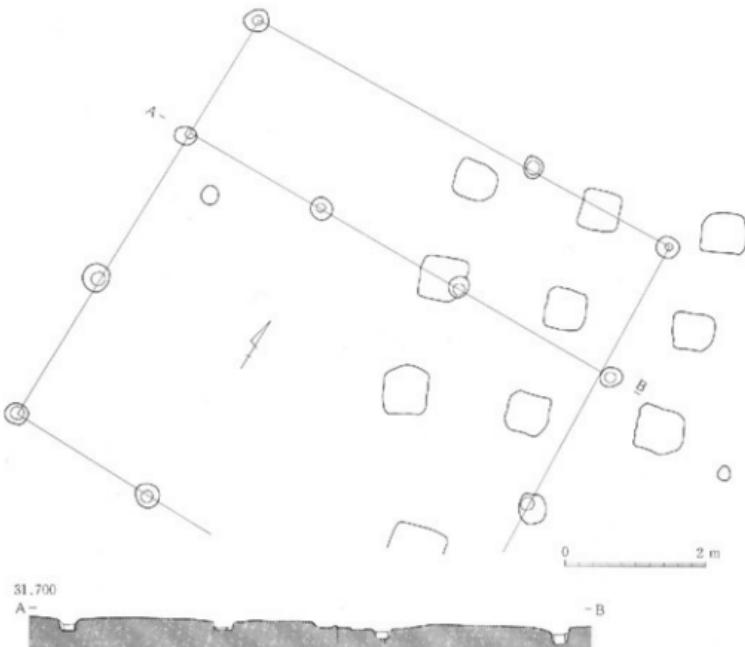


図5 1号掘立柱建物跡

等から判断しがたく不明である。建物の方向は西側柱列でN-0°-Eである。柱間寸法は梁行西側で北から189+243+225cmで総長657cm、桁行北側で西から445(2間分)+225cmで総長670cm、北側二列目で215+228+250cmで総長693cmを計る。柱穴掘り方は径30~40cmの楕円形である。柱痕跡は径10~20cmの円形で、深さは5~15cm程度である。柱穴埋土は灰黄褐色のシルト質粘土である。2号掘立柱建物跡と重複関係にあり柱穴を切っている。

2号掘立柱建物跡 桁行2間、梁行2間の純柱の東西棟の建物跡である。梁行列を基準とすると桁行列は南側へ7°程ずれており、建物の平面形が菱形を呈している。建物の方向は梁西側でN-14°-Wである。桁行の柱間寸法は北側で西から184+194cmで総長378cm、中央で187+188cmで総長375cmを計る。梁行の柱間寸法は西側で北から150+154cmで総長304cm、中央で153+154cmで総長308cmを計る。柱穴掘り方は隅丸長方形を呈し、最大のもので70×65cm、最小のもので60×50cmを計りほぼ均一な規模をもつ。柱痕跡は径20cm前後で、遺存状況の良好なもので深さ40cmを計る。柱穴埋土には明黄褐色・

黄橙色・灰黄褐色のシルト質粘土を混じり合わせたものを使用し、互層になっており堅くつきかためられている。

3号掘立柱建物跡 南北列1間(柱間寸法270cm)・東西列1間(柱間寸法225cm)のみの確認であるため全容は不明である。建物の方向は東側列でN-2°-Wである。柱穴掘り方は隅丸長方形を呈し、最大のもので90×70cm、最小のもので65×55cmを計る。柱痕跡は径20cm前後で、遺存状況の良好なもので深さ40cmを計る。柱穴埋土には明黄褐色・黄橙色のシルト質粘土を混じり合わせたものを互層にし堅くしめている。東西列西側の柱穴では柱痕確認面において平瓦片が立った状態で1点出土している。又、柱痕跡直下の柱穴底面において平瓦が凹面を上に向け、敷かれた様な状態で検出されている。検出状況から礎板としての使用が考えられる。復元作業で三枚の完形品となっている。他に土師器甕が出土している。

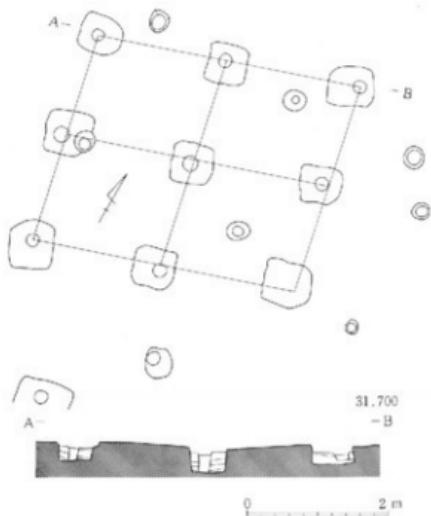


図6 2号掘立柱建物跡

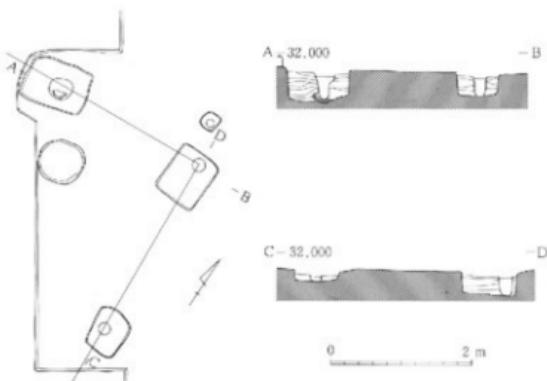


図7 3号掘立柱建物跡

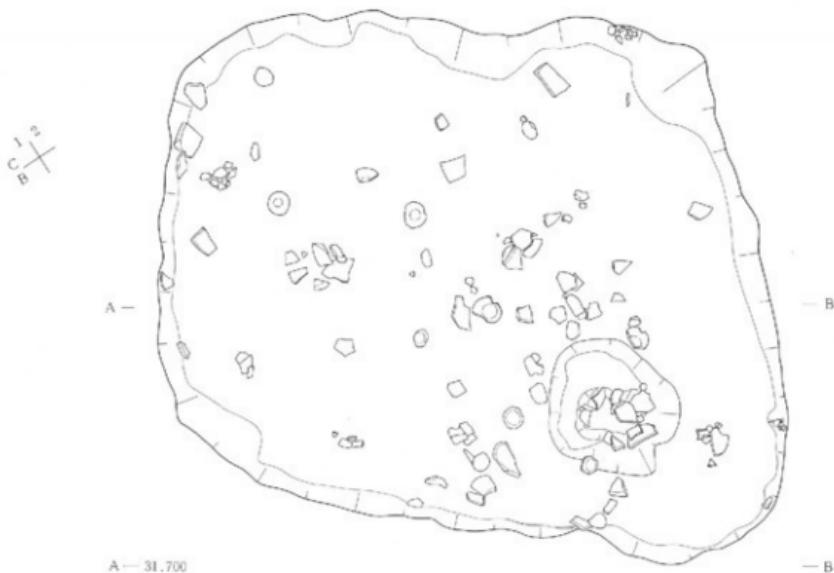
(2) 土 壤

1号土壤 調査区中央部西側のゆるやかに北側へ傾斜する地点で確認した。平面形はやや重んだ隅丸長方形を呈する。大きさは東西軸で320cm、南北軸で260cmを計る。深さは確認面から20~30cm程である。壁は南側から西側にかけては急な立ち上がりをみるが、東側から北側ではゆるやかな立ち上がりとなっている。底面はほぼ平坦で、南西部隅には径80cm程の梢円形の浅い落ち込みがみられる。堆積土は5層に分けられ各層から遺物が出土している。種類として土師器環・甕、土師質土器鉢、須恵器環・甕・壺、平瓦・丸瓦、石製品がある。土師器環体部に「宗」と墨書きされたものが一点含まれている。多くの出土量にもかかわらず上器・瓦類はほとんどのものが破片資料であり、このような状況からも廐場所としての性格が考えられる。

2号土壤 調査区中央部で確認された。現代の溝に一部切られているが、平面形は円形を呈する。大きさは長軸で150cm、深さ40cmを計る。断面形はゆるやかな立ち上がりをもつ橈鉢形である。堆積土は6層観察され、レンズ状堆積をなしている。少量の須恵器環・甕、平瓦・丸瓦が出土している。

3号土壤 調査区中央部、2号土壤東側に位置する。現代溝に西側部が切られているが、平面形は円形を呈する。大きさは東西軸で110cmを計り、深さは30cm程である。断面形は橈鉢状を呈する。堆積土は5層みられ、須恵器環・甕、丸瓦が出土している。形態や遺物出土状況から2号土壤と同類のものと考えられる。

5号土壤 調査区南西部に位置する。平面形は円形で断面は舟底形を呈する。大きさは長軸で65cm、深さ20cmを計る。堆積土は4層みられ、土師器環が出土している。



A — 31.700

— B



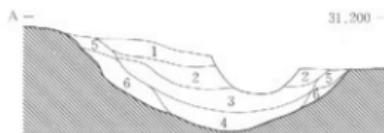
1号土壤堆積土観察表

層	上色	上性	備考
1	灰褐色 10YR 5/4	シルト	土塊を含む
2a	に赤い黄褐色 10YR 5/4	シルト	炭化物・土塊を含む
2b	12.20V 黄褐色 10YR 5/4	シルト	炭化物多く含む
3a	に赤い黄褐色 10YR 5/4	シルト	炭化物含む

3b	に赤い黄褐色 10YR 5/4	シルト	
4	黄褐色 10YR 5/4	シルト	
5a	12.20V 黄褐色 10YR 5/4	シルト	
5b	12.20V 黄褐色 10YR 5/4	粘土質シルト	
6	12.20V 黄褐色 10YR 5/4	粘土質シルト	炭化物を多量に含む

0 1 m

図8 1号土壤遺物出土状況



31.200 — B

C —

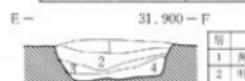
31.100 — D

2号土壤堆積土観察表

層	土色	土性	備考
1	に赤い黄褐色 10YR 5/4	シルト	
2	に赤い黄褐色 10YR 5/4	シルト	炭化物を含む
3	灰褐色 10YR 5/4	シルト	無機鉱物を斑に含む
4	緑褐色 10YR 5/4	粘土質シルト	
5	に赤い黄褐色 10YR 5/4	シルト	
6	灰褐色 10YR 5/4	シルト	

3号土壤堆積土観察表

層	土色	土性	備考
1	灰褐色 10YR 5/4	シルト	
2	に赤い黄褐色 10YR 5/4	シルト	
3	に赤い黄褐色 10YR 5/4	シルト	
4	に赤い黄褐色 10YR 5/4	シルト	
5	褐灰色 10YR 5/4	シルト	



5号土壤堆積土観察表

層	上色	上性	備考
1	灰褐色 10YR 5/4	砂質粘土	土塊を含む
2	明黄色 10YR 5/4	砂質粘土	炭化物を含む
3	に赤い黄褐色 10YR 5/4	砂質粘土	
4	明黄色 10YR 5/4	砂質粘土	

0 1 m

図9 2・3・5号土壤断面

(3)溝跡

1号溝跡 調査区北側の緩斜面に位置し、やや北側に屈曲する東西方向に延びる溝である。上幅は最大で160cm・深さ30cmを計り、断面は逆台形を呈する。堆積土は大きく4層に分けられ、土師器壺・甕、須恵器壺・甕、灰釉陶器壺・皿、平瓦・丸瓦が出土している。調査区東側で3号溝に切られている。

2号溝跡 調査区東側から中央部に向けて延びる溝である。上幅は最大で70cm、深さは15cmを計り、断面は立ち上がりのゆるい皿状を呈する。堆積土は2層観察される。1号溝跡南壁に接しているが削平のため新旧関係については不明である。溝の軸線が真北に対してほぼ直交しており建物跡との関連が留意される。

3号溝跡 調査区北側の角に位置するため一部分の確認にとどまっている。上幅は70cm程度で深さは20cmを計る。断面は皿状を呈する。堆積土は3層観察され、土師器甕・須恵器甕が出土している。2号溝跡と同様に軸線が真北に対してほぼ直交している。2号溝跡との距離は850cm程度である。

10号溝跡 調査区北側角に位置する。上幅は100cm程度で深さは20cmを計る。断面は舟底形を

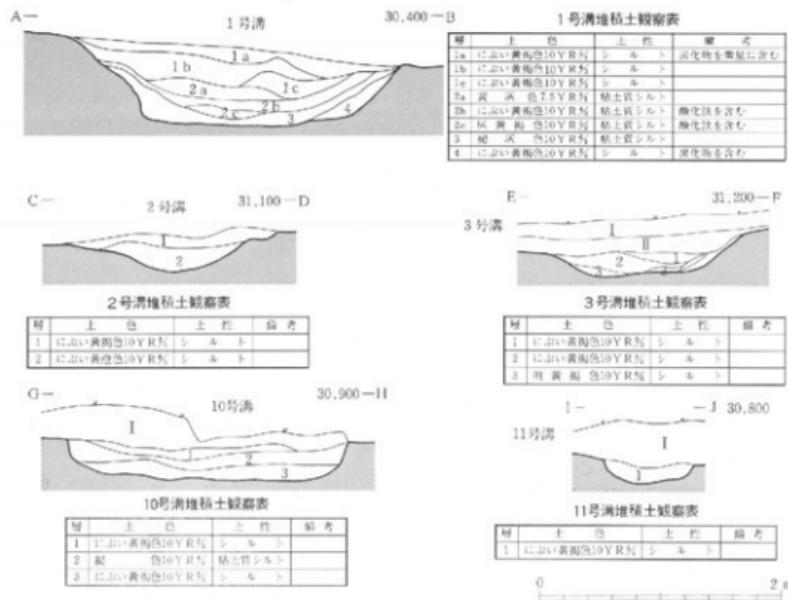


図10 溝跡断面

量する。堆積土は3層観察される。

11号溝跡 10号溝跡東側に位置する。上幅40cm深さ10cmを計る。断面は舟底形を呈する。堆積土は1層である。

(4)溝状遺構

調査区中央部の緩斜面に位置する。平面は西側にやや屈曲した中腰れの形となっており、現存長は540cmを計り、最大幅は150cmである。横断面は立ち上がりのゆるい皿状を呈し、縦断面は北側のみに立ち上がりがみられる。底面はほぼ平坦で北側の立ち上がり部で深さ30cmを計る。堆積土は4層みられ、土師器器台・高坏・坏・須恵器坏・甕、灰釉陶器瓶、平瓦が出土している。

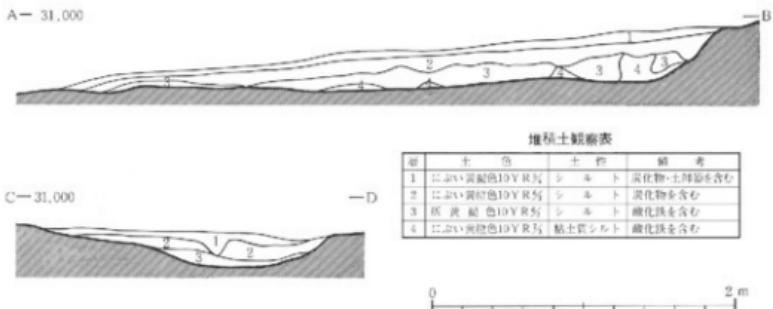


図11 溝状遺構断面

(5)その他

掘立柱跡 2号掘立柱建物跡の南側で発見された。柱穴掘り方は隅丸方形を呈し、長軸は80cmを計る。柱痕跡の径は20cmで深さ48cmを計る。柱穴1基のみの確認であるため性格については不明であるが、規模・配置からみて掘立柱建物跡の可能性が考えられる。

ピット群 小大のピットが数多く確認されたが、組み合うものもみられず性格は不明である。土師器・須恵器が出土するものがある。

3. 出土遺物について

今回の調査で出土した遺物には、古瓦・土師器・須恵器・施釉陶器・石製品・鉄製品がある。平箱にして10箱程の出土量である。瓦と土師器が最っとも多く全体の9割以上を占める。以下種類別に略述する。

瓦類

平瓦　出土した瓦は大半が小破片であるため全容は知り得ないが、叩き目圧痕や調整から下記に分類できる。

1類　凸面に格子叩き目がみられるもので、正格子叩き目と斜格子叩き目に分けられる。正格子叩き目は長細い圧痕を残す特徴がみられ、斜格子叩き目は格子の大きさから三つに細分される。凹面には糸切り痕がみられ、模骨痕の観察されるものもある。

2類　凸面に平行叩き目がみられるものである。瓦の長軸に対し斜行している。凹面には糸切り痕や模骨痕がみられ、一部ナデ調整が観察される。

3類　凸面全面にヘラケズリが施こされているものである。叩き圧痕に関しては不明である。凹面には模骨痕が観察される。

4類　凸面に縄叩き目がみられるものである。瓦の長軸に縱走している。ナデ調整による磨消したものもみられる。縄叩き圧痕の大きさから細分される。凹面には糸切り痕や布目痕が観察される。

5類　凸面に縄叩き目がみられ、ナデ調整により一部叩き目が磨り消されるものである。凹面には縦位方向のヘラケズリが観察される。

丸瓦　叩き目圧痕や形態の違いから下記に分類できる。

1類　凸面に格子叩き目がみられるものである。斜格子叩き目である。凹面には布目痕が観察される。

2類　凸面に平行叩き目がみられるものである。長軸に対し縱走・斜行・平行するものがあり細分される。全面にナデ調整が施こされるものもある。凹面には糸切り痕や布目痕が観察される。行基葺瓦の形態をもつものである。

3類　凸面全面にナデ調整がみられるものである。叩き圧痕に関しては不明である。凹面には糸切り痕や布目痕が観察される。行基葺瓦の形態をもつものである。

4類　凸面に縄叩き目がみられるものである。ナデ調整により一部磨り消しがみられる。凹面には布目痕が観察される。玉縁をもつ形態である。

土器類

土師器　全体的に摩耗が著しく不明な点が多いが、ロクロ未使用とロクロ使用のものに分けられる。器種として、前者には器台・高坏があり、後者には坏・高台付坏・甕がある。

器台　坏部下端から脚部の一部が残存する。坏部中央に孔が穿たれ脚部は幅広がりである。

高坏　幅広がり気味の脚部破片である。

坏　内面にミガキ調整がみられ、黒色処理が施こされている。底部に回転糸切り痕や回転ヘラケズリが観察されるものがある。大部分が摩滅のため特徴等不明のものが多い。

高台付坏　坏底部から台部のもので、高さ1cm程の台が付く。高台は外方へ張り出す特徴が

みられ、付高台である。

壺 破片資料のみである。口縁部が「く」の字状に外反するもの、体部にヘラケズリや叩き目が観察されるものがある。

土師質土器 破片資料であるが台付鉢と思われる。色調は黄橙色を呈する。外面は叩き目に後にナデ調整が施され、内面には回転ヘラナデがみられる。

須恵器 器種には壺・甌・瓶がある。ほとんどが破片資料である。

壺 ロクロ調整後の切り離しは回転糸切りで無調整である。底径の大きさから二種類に分けられる。口縁部内寄気味のものが多い。

甌 器形を知り得る資料は皆無である。外面調整等に叩き目・ヘラケズリ・波状沈線が観察される。叩き目は全て平行叩き目である。波状沈線はくずれ気味である。又、平行沈線の下部に縱方向に施された波状沈線もみられる。内面はナデ調整が主体であるが、平行文・同心円文・樹枝状のオサエがみられる。

壺 口縁部と底部の破片資料で詳細は不明である。

陶 器 類

灰釉陶器 器種には壺・皿・瓶がある。全て破片で全容のわかるものはない。又、灰釉陶器に類似するものが出土しているが断定には至らなかった。

壺 口縁部から体部にかけてのもので、口唇部が「く」の字状に外傾する。内面に茶系色の釉がみられる。胎土は緻密で灰白色を呈する。

皿 底部破片である。外面はロクロナデと回転ヘラケズリ調整が施されている。器厚の違う部分がみられ有段皿とも考えうる。重ね焼きの跡が観察される。内面には灰色系の釉がみられる。胎土は良好で灰白色を呈する。

瓶？ 体部破片である。外面には黄緑系の釉が施され、ハケ塗りの痕跡が観察される。他の器種に比べて胎土はやや粗雑である。色調は灰白色を呈する。

石 製 類

石庖丁 刃部の一部分を残し欠損している。刃部は両面より砥がれており尖鋭である。最大厚は0.7cmを計る。石材は珪質岩である。

石錐？ 四縁に剥離調整がみられ、基部は丸味をもち断面は菱形を呈する。長さ3.9cm、幅1.3cmを計る。石材は頁岩である。

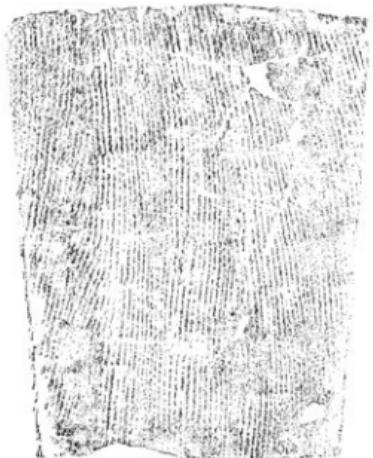
石製品 径1.6cm程の円形を呈するもので磨製品である。最大厚を中央部にもち0.5cmを計る。周縁は両面より磨かれており中央部に棱がみられ、厚さ0.4cmを計る。碧玉製である。

鐵 製 類

刀子が確認されているが破損・鈍化が著しく詳細は不明である。製品外では鉄鋸がある。



図12 出土遺物I (平瓦 1~3類)



0 10cm



図13 出土遺物Ⅱ（平瓦4類）



0 10cm

図14 出土遺物Ⅲ (平瓦 4種)

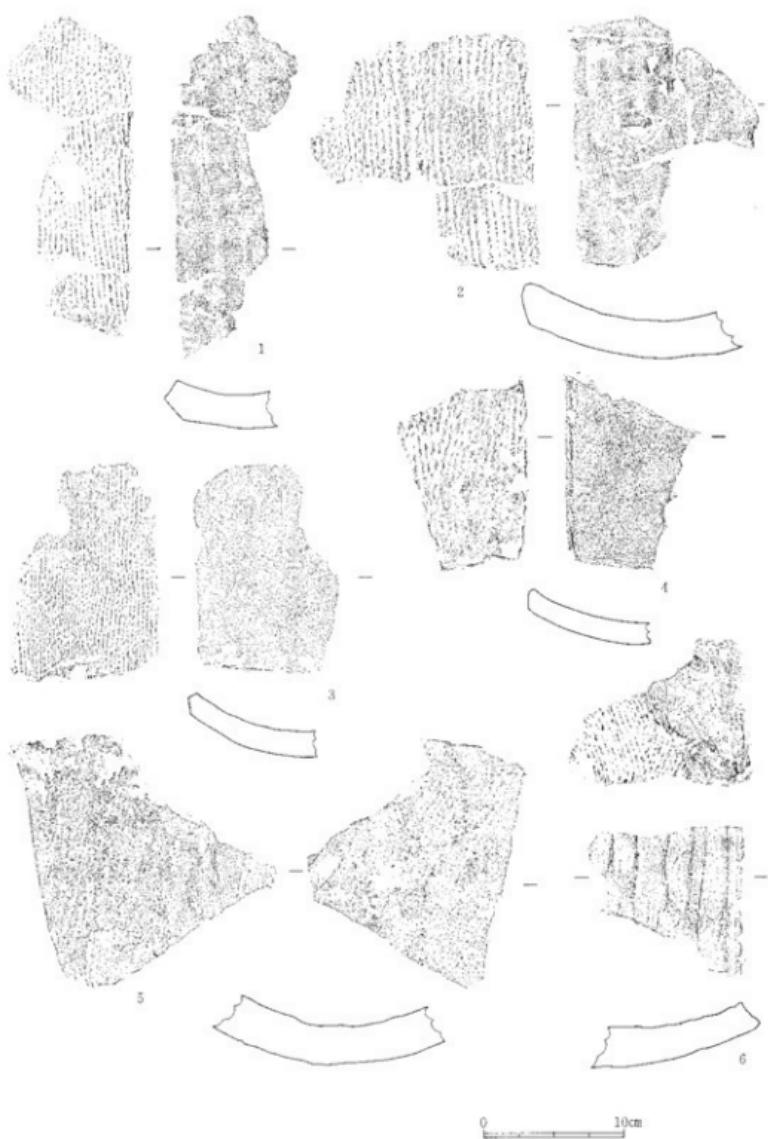


図15 出土遺物IV (平瓦4・5類)

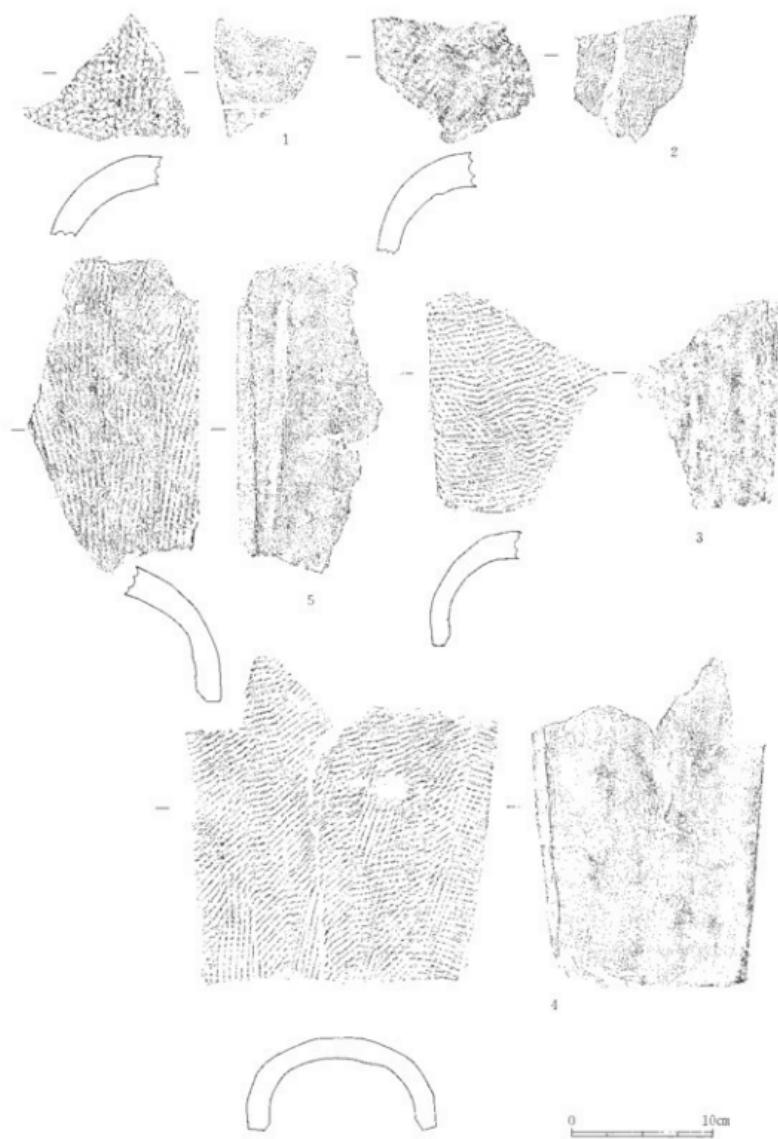


図16 出土遺物V (丸瓦1・2類)

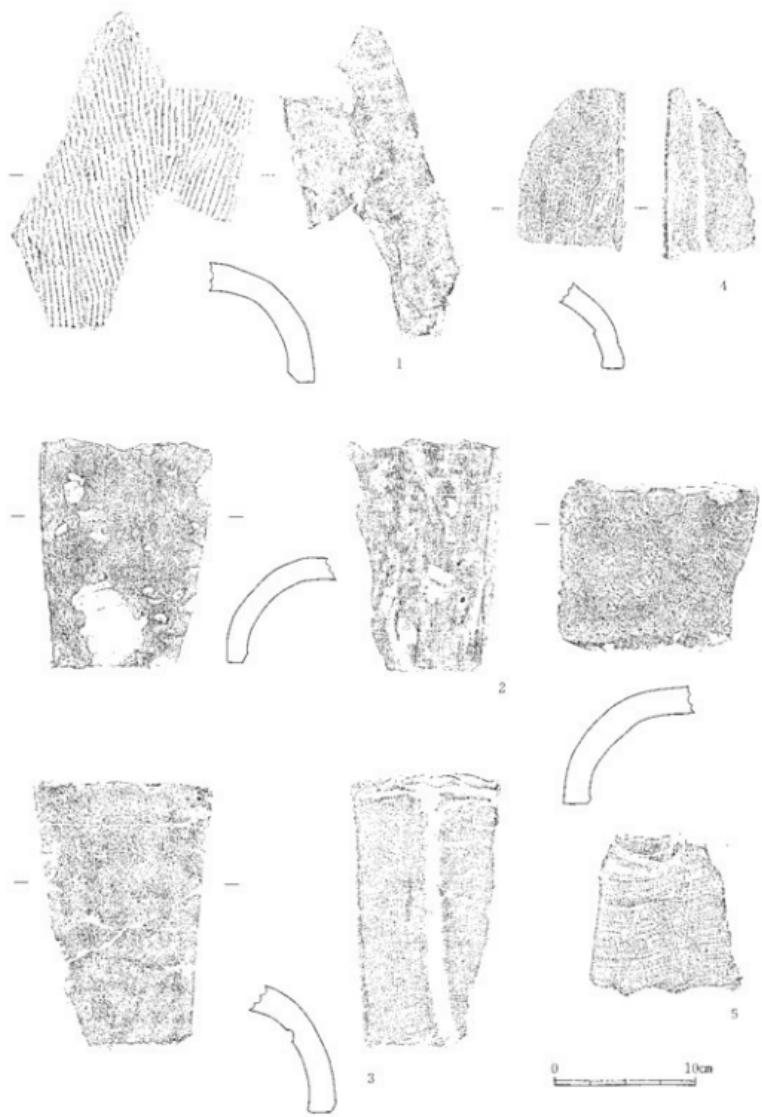


図17 出土遺物VI (丸瓦2~4類)

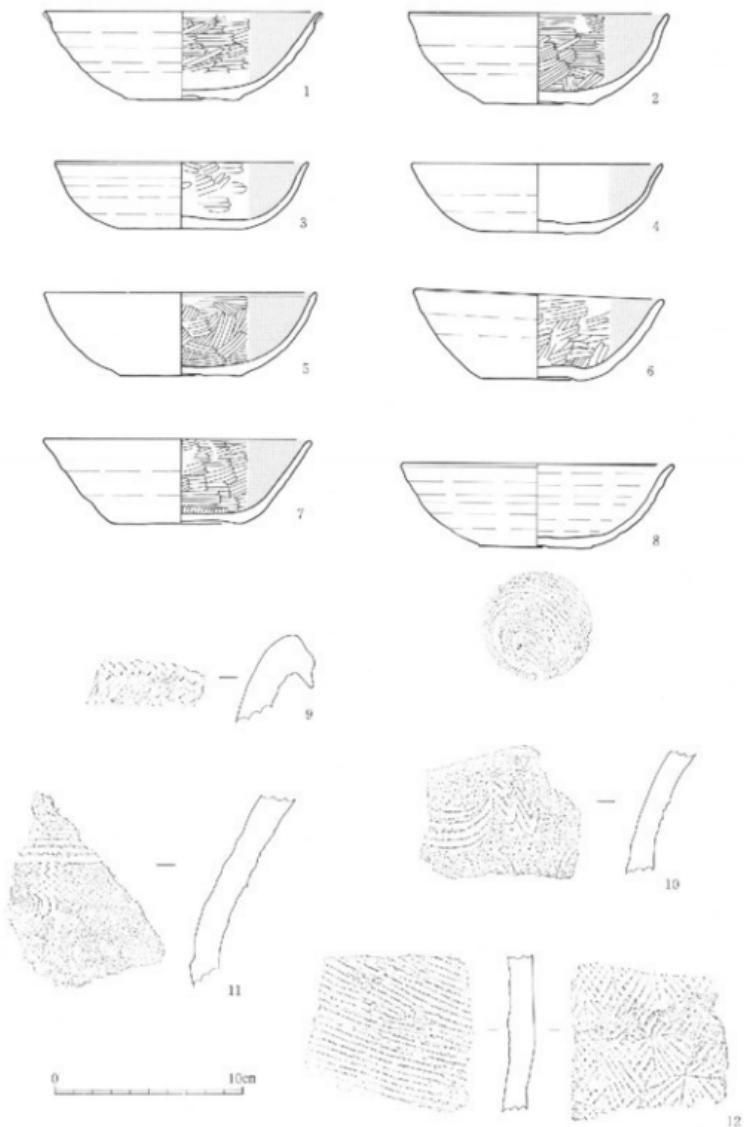
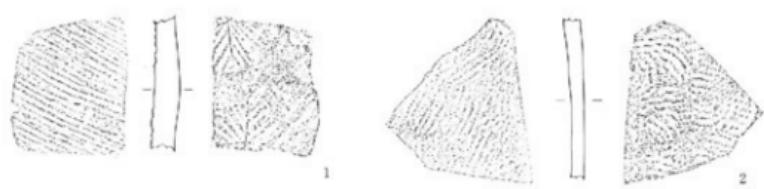
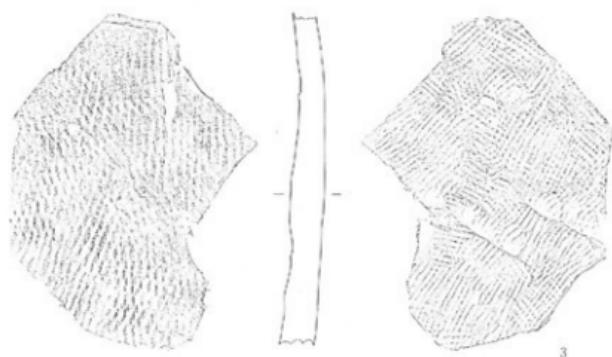


図18 出土遺物VI (土師器・須恵器)

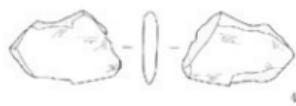


1

2



3



4



5

0 10cm

図19 出土遺物図 (須恵器・石製品)

表1 出土遺物集成

		掘立柱 3号	土 壤				溝 1号 3号	溝状 遺構	ピット	その他	計	
			1号	2号	3号	5号						
瓦	平瓦	1類	4					1		2	7	
		2類	2							1	3	
		3類	1				1				2	
		4類	4(3)	18	2		21	4		22	71	
		5類								1	1	
		不明					3				3	
	丸瓦	1類		1			1				2	
		2類		6			5			2	13	
上師器	瓦	3類		2							2	
		4類	15	1	3		11				39	
	器台	脚部						3			3	
	高环	脚部						1			1	
師	环	口縁部	333			1	2	15	1	5	357	
		体部	683			18	28	7		24	760	
		底部	369			3	11	12	1	22	418	
	高台付环	底部		7							7	
器	甕	口縁部	1	39			35	1	2	11	6	95
		体部		431			257	4	25	17	146	880
		底部		36			32	1	7	2	9	87
	鉢	口縁部		7								7
上部質上器		体部		8								8
		体部-底部		3								3
	須恵器	口縁部		76		1	25		4	5	111	
患器	环	体部		54	1		28			4	87	
		底部		43			24		2	4	73	
	甕	口縁部		6	2		3		2	2	15	
		体部		46	2		26	4	3	19	100	
陶器		底部					1		1		2	
	壺	口縁部		3		2					5	
		底部		1						1	2	
	灰釉陶器	口縁部					1				1	
施釉陶器	瓶	底部					1			1	2	
	釉	体部					1			3	4	
	陶	底部					1				1	
	石製類	石瓶	丁	1							1	
鐵製類		石製品		1							1	
		石錐								1	1	
	刀子		4							4	8	
	鉄鋸		2								2	

() は完形品数

VII. 考察

1. 出土遺物の年代

瓦 平瓦は類別の結果5類に分けられることを述べたが、大きく造瓦技法の点から二者に分けられる。前者は瓦凹面に模骨痕がみられる粘土板巻作りのもの、後者は一枚作りによるものである。1～3類の瓦が前者に相当し、後者が4類にある。同類の瓦出土例をみると、平瓦1類では多賀城創建平瓦第4類や伏見廃寺跡・三輪田遺跡にみられ、大蓮寺窯跡のテラス状遺構からは1～3類の瓦がみられる。平瓦4類は多賀城Ⅲ期瓦の特徴をもつものがあり、一般的にみられるものである。^(註5)

丸瓦は4類に細分したが、造瓦技法から二者に分けられる。前者は粘土板巻作りのもので行基葺瓦、後者は粘土紐巻作りで玉縁付きの瓦である。2・3類の瓦が前者にあたり、4類の瓦が後者にあたり。丸瓦2類は多賀城創建丸瓦第4類や伏見廃寺跡にみられ、丸瓦3類は角田郡山遺跡にみられる。丸瓦4類は多賀城跡など一般にみられるものである。^(註6)

以上の類例から瓦の年代についてみると、山田寺系単弁蓮花軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦の組み合わせは多賀城創建以前の指摘がある。これらの組み合わせをもつ伏見廃寺跡やロクロ挽き重弧文軒平瓦を伴なっている三輪田遺跡は多賀城創建期以前・多賀城創建期の可能性を指摘している。このことから平瓦1～3類は多賀城創建期以前か多賀城創建期の可能性が考えられる。又、大蓮寺窯跡の調査によってロクロ挽き重弧文軒平瓦に伴なう平瓦が発見されているが、この平瓦と叩き目压痕をはじめとし胎土・焼成の同じ平瓦がみとめられており、同窯の製品とみることができ、このことからも上記の可能性が考えられる。丸瓦2・3類も多賀城創建期以前か多賀城創建期の年代が考えられる。平瓦4類・丸瓦4類は多賀城Ⅲ期以後の範疇に入るものと考えられる。^(註7)

土師器 ロクロ未使用の土師器は器台と高环であるが、形態・特徴から古墳時代のものと考えられる。器台は壺部中央の孔や幅広がりの点から埴釜式に比定することができる。高环については不明である。ロクロ使用の环は表形ノ入式にみることができ、壺も同型式に相当すると考えられる。^(註8)

須恵器 环は回転糸切り無調整のもので、口径に対する底径の比が小さい数値を示す。「多賀城周辺における杯形土器の変遷」では9～b類に類別されるもので、10世紀代の年代があげられている。壺・壺では古い様相をもつものもあるが詳しい点については不明である。^(註9)

灰釉陶器 壺は口縁部の反りや色調から黒窓14号窯式に比定することができ、他のものも黒窓窯の製品と考えられる。11世紀前後の年代が考えられる。^(註10)

2. 遺構の性格と年代

掘立柱建物跡は調査区内の南側に位置しており、他の地点に較べれば平坦地にあたる。2号・3号掘立柱建物跡と掘立柱跡は柱穴の規模・位置関係から同ブロックのものと考えられ、建物方向がほぼ真北を示すものがあることなどから規画をもつ建物群の存在を考えうる。3号掘立柱建物跡の柱穴からは多賀城Ⅲ期瓦に比定される平瓦が礎板としてみられ、復元の結果三枚の完形瓦となっており、平瓦と建物との年代のひらきはないものと考えられる。他の建物跡と掘立柱跡も同様な時期が考えられる。1号掘立柱建物跡は上述した柱穴に較べると規模も小さく、2号掘立柱建物跡の柱穴を切っていることからも時期は下るものと考えられる。

土壙は1号土壙を除いて遺物も少なく際だった特徴もなく性格については不明である。1号土壙からは多賀城創建期以前・多賀城創建期と考えられる瓦や表杉ノ入式に比定される土師器壊や土師質の鉢など年代に差をもつ遺物が混在して出土している。これらから廃棄されたものと考えられ、捨て場としての性格が考えられる。廃棄された時期は出土した遺物の中で最っとも新しい特徴をもつ土師器壊か土師質土器の年代が妥当であり、平安期と考えられる。

溝跡では10・11号溝には出土遺物がなく時期に関しては不明であるが、土色・土性の比較から古代のものと考えられる。1号・2号・3号溝跡は調査区北側に位置し、全ての溝跡が調査区域外へ延びており性格等について不明な点が多い。1号溝跡は年代のきめてとなる遺物を出土していないが堆積土上層・下層よりロクロ土師器がみられることなどから平安期のものと考えられる。3号溝跡も同様な年代が考えられるが、1号溝跡を切っていることからいくらか下るものと考えられる。2号と3号溝跡は同様な形状をもち、溝軸線がほぼ真北に直交しており掘立柱建物跡との対応がみられ、区画としての性格が考えられる。

溝状遺構からは多種にわたる出土遺物がみられるが、土師器・須恵器以外は確認時の出土であり、年代としては平安期が考えられる。土師器・須恵器は全て破片である。性格については不明である。

3. 遺跡の性格

今回の調査では掘立柱建物・土壙・溝・溝状遺構などが発見され、瓦・土師器・須恵器・石器などの遺物が出土した。平安期以外の遺構は検出されなかったが、燕沢遺跡は縄文時代から平安時代にかけての遺跡であることが言える。出土遺物では土師器・須恵器が他を圧倒しており、平安期を中心とするものと考えられる。特に瓦を伴なって規則性のみられる掘立柱建物跡の存在は国家的施設としての性格をうかがうことができ、從来言われてきた寺院か官衙の存在を裏付ける結果となっている。又、廃棄場所としての性格をもつ土壙から出土している瓦の中には多賀城創建期以前か創建期に比定されるものがあり、これらから上記年代の可能性をもつ

造構の存在がうかがわれる。

しかし、今回の調査は面積にして720m²程のもので、遺跡全体を把握するには至っておらず、今後の資料增加を待つ必要がある。

VII. ま　と　め

今回の調査で得られた成果は次のようになる。

1. 燕沢遺跡は台ノ原・小出原丘陵東端部の台地に位置する縄文時代から平安時代にかけての遺跡である。
2. 調査区内より掘立柱建物跡3棟・土塙4基・溝跡5条・溝状造構1基・掘立柱跡1基・ピット多数を発見し、瓦・土師器・須恵器・施釉陶器・石製品・鉄製品が出土した。
3. 発見された掘立柱建物跡や瓦から寺院跡か官衙遺跡としての性格が考えられ、造構の年代は出土遺物より平安期と考えられる。
4. 出土した瓦の中には、多賀城創建期以前又は創建期に比定されるものがある。左記の年代をもつ造構の存在の可能性がうかがわれる。
5. 詳細な性格については今後の調査・研究に待つところが大きい。

註

- (註1) 石田茂作「仏教の初期文化」岩波講座『日本歴史』昭和9年
- (註2) 伊東信雄「燕沢古瓦出土地」仙台市史3 「燕沢古瓦出土遺跡」『仙台の文化財』宝文堂
- (註3) 内藤政恒「仙台市台ノ原・小田原瓦窯址群と出土の古瓦(Ⅲ)」『歴史考古』第12号 昭和39年
- (註4) 原田良雄編『東北古瓦図録』には唐車文軒丸瓦・宝相花纹軒丸瓦・細弁蓮花文軒丸瓦・重弁蓮花文軒丸瓦、均整唐草文軒平瓦が掲載されており、その後の踏査においても上記の軒瓦が採集されている。
- (註5) 進藤秋輝・高野芳宏・渡辺伸行「多賀城創建瓦の製作技法」『研究紀要Ⅱ』宮城県多賀城跡研究所 昭和50年
- (註6) 佐々木茂楨「宮城県古川市伏見廃寺跡出土の古瓦」『歴史考古』第19・20合併号 昭和46年
註11に同じ
- (註7) 丹羽利茂「三輪山遺跡」古川市文化財 調査報告書第4集 昭和55年
- (註8) 古窯跡研究会「仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告」『陸奥国官窯跡群Ⅱ』昭和51年
- (註9) 進藤秋輝・高野芳宏両氏御教示による。
- (註10) 新庄屋元晴「角田郡山遺跡」角田市文化財調査報告書第3集 昭和55年
- (註11) 進藤秋輝「多賀城系古瓦の二系統」『研究紀要V』宮城県多賀城跡研究所 昭和53年
- (註12) 渡辺泰伸氏の協力を得て実際に瓦どうしの比較検討を行なった結果である。
- (註13) 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 昭和32年
- (註14) 同田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所 昭和49年
- (註15) 白鳥良一氏の御教示による。

写 真 図 版





図版1　遺構周辺航空写真（南より、昭和32年）



図版2　遺跡周辺航空写真（南より、昭和55年）

3 造構配置（北西部）



4 造構配置（中央部）



5 造構配置（南西部）



6 1号据立柱建物跡
(南西より)



7 2号据立柱建物跡
(南より)



8 3号据立柱建物跡
(東より)



9 3号掘立・柱穴断面
(南より)



10 3号掘立・柱穴内
瓦検出状況



11 1号土壤・遺物検出
状況 (東より)

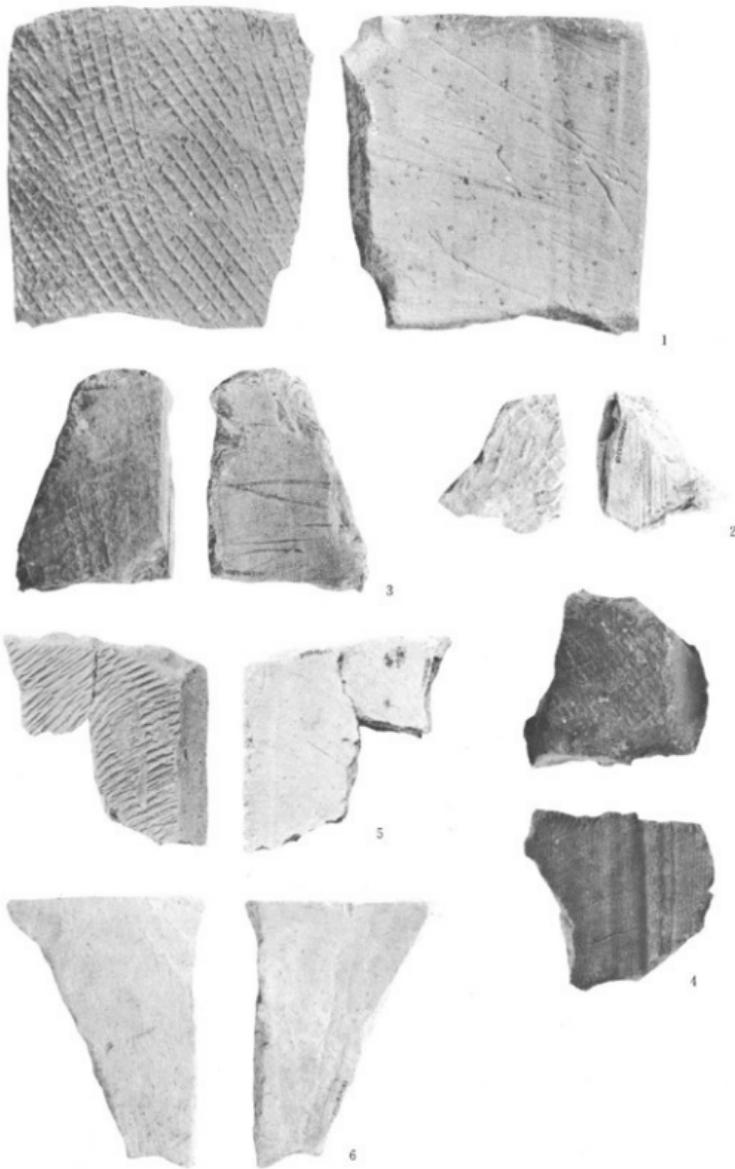


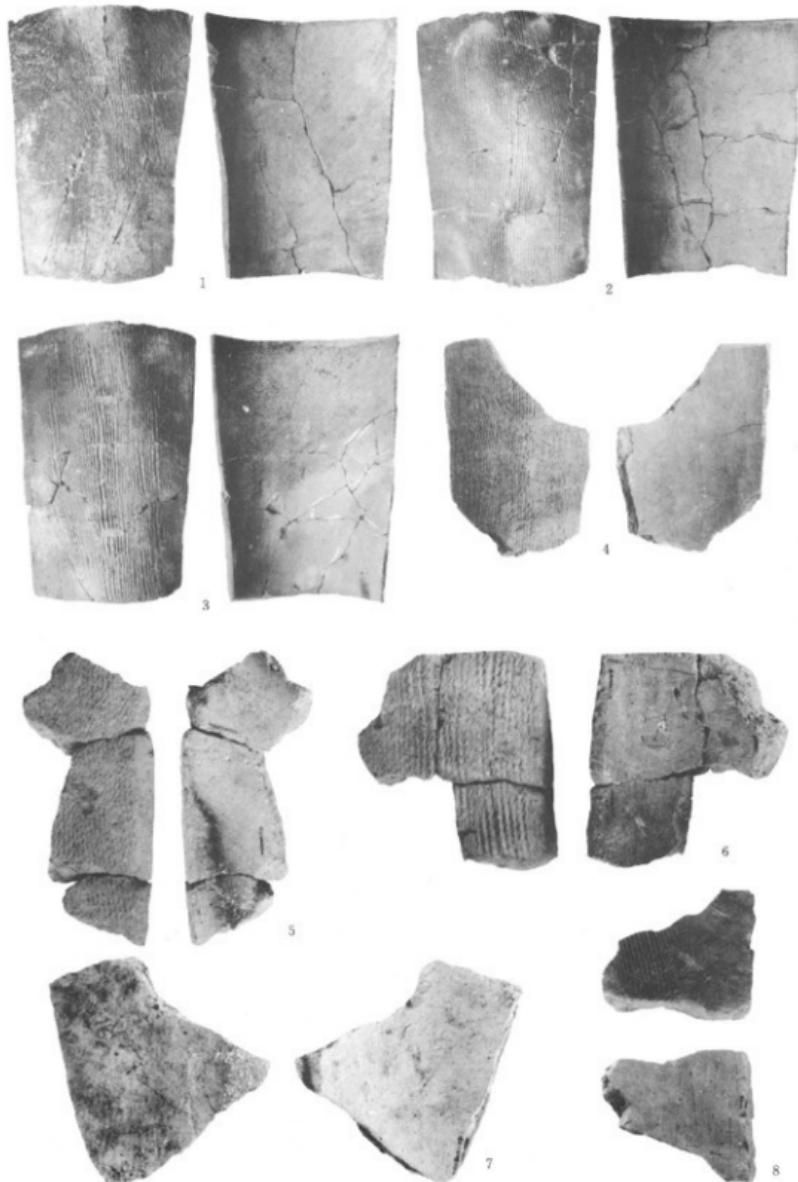
12 1号土壤・遺物検出
状況（北西部）



13 1号溝（西より）







图版16



図版17

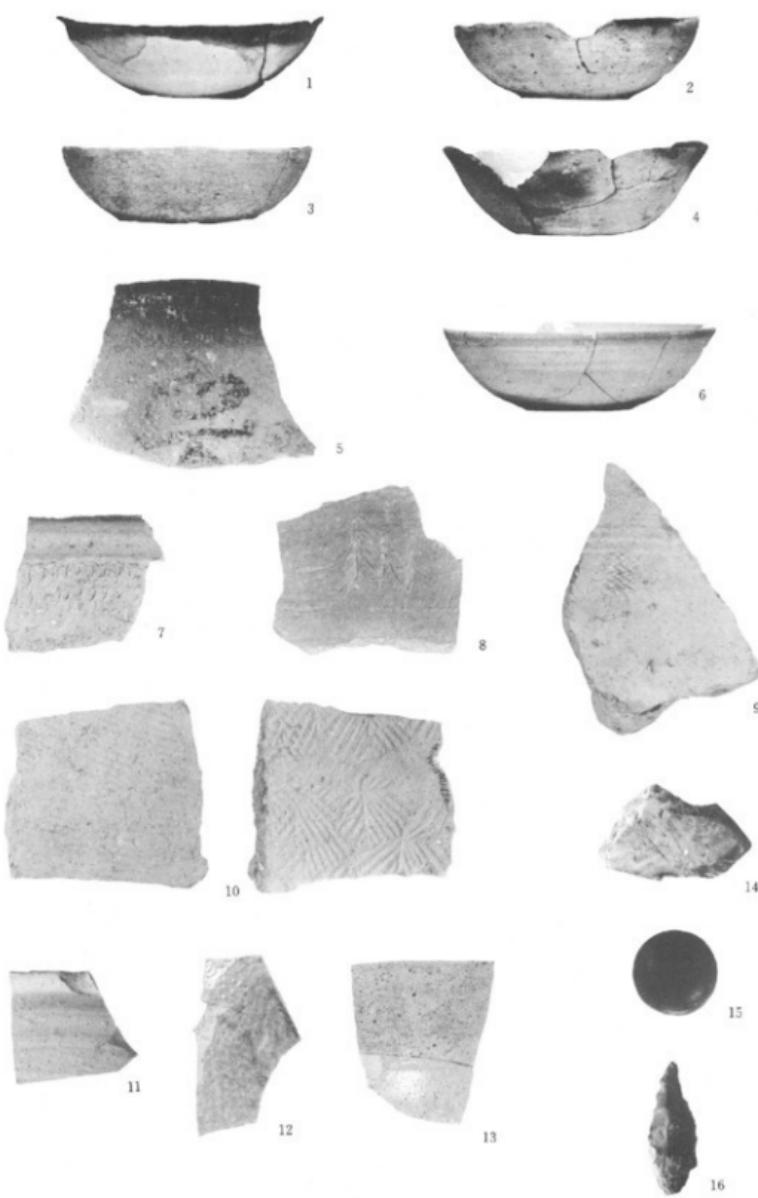


表2 掘出出土遺物観察表

図版番号	種類	特徴	地盤	構区	備考
12-1 平瓦 1種	凸面 條子目印き (斜棱子) 幅6cm程の単位 凹面 横骨脊・布目 (1cm幅12×12) ・在縫い合わせ目・斜行する条 色調 黄白 硬質 最大厚2.5cm	1号上塙 理 土 (整理番号) 平瓦1	写真図版14-1		
-2 * 凸面 凹面 色調	條子目印き (斜棱子) 布目 (12×12) 縫合のケズリ 浅黄褐色 硬質 最大厚2.6cm	1号土塙 理 土	写真図版14-2		
-3 * 凸面 凹面 色調	條子目印き (斜棱子) 浅いケズリ 糸切り縫・布目 (10×10) ・斜行する条痕 (布目下) ・縫合のナ ダ 色調 黄白色 硬質 最大厚1.9cm	C-3区 T層	写真図版14-3 平瓦 28		
-4 * 凸面 凹面 色調	條子目印き (正棱子) 浅いケズリ 糸切り縫・横骨脊・布目 (10×10) 一部條子目印き 色調 黄色 硬質 最大厚2.5cm	試掘	写真図版14-4 平瓦 39		
-5 平瓦 2種	凸面 平行引目 凹面 糸切り縫・横骨脊・布目 (9×9) ・ナ ダ 色調 浅黄褐色 硬質 最大厚2.4cm	試掘	写真図版14-5 平瓦 13		
-6 平瓦 3種	凸面 ケズリ (縦・横接方向) 凹面 横骨脊・布目 (10×10) 在縫い合わせ目 端部ナ ダ 色調 黄褐色 やや軟質 最大厚2.7cm	1号溝 理 土	写真図版14-6 平瓦 34		
13-1 平瓦 4種	凸面 繩印き目 (縦位) ・中央部に3.5×1cmの凹形2ヶ所 一部自然 縫 凹面 糸切り縫・布目 (8×8) 周縁部ナ ダ 色調 黄白色 硬質 (完形品) 長軸37cm、広端部26.5cm、狭端部21cm、厚さ1.6cm	1号獨立 柱建物 底面	写真図版15-1 平瓦 92		
-2 * 凸面 凹面 色調	繩印き目 (縦位) 中央部に3.5×1cmの凹形2ヶ所 一部自然縫 糸切り縫・布目 (8×8) 周縁部ナ ダ 色調 黄白色 硬質 (完形品) 長軸37cm、広端部26.5cm、狭端部22cm、厚さ2.0cm	1号獨立 柱建物 底面	写真図版15-2 平瓦 93		
14-1 * 凸面 凹面 色調	繩印き目 (縦位) 中央部に3.5×1cmの凹形2ヶ所 脱自然縫 糸切り縫・布目 (8×8) 周縁部ナ ダ 色調 黄白色 硬質 (完形品) 長軸38cm、広端部25cm、狭端部21cm、厚さ1.6cm	1号獨立 柱建物 底面	写真図版15-3 平瓦 94		
-2 * 凸面 凹面 色調	繩印き目 (縦位) 中央部に3×1cmの凹形1ヶ所 糸切り縫・布目 (7×7) 周縁部ナ ダ 色調 黄白色 硬質 最大厚2.1cm	2層	写真図版15-4 平瓦 15		
15-1 * 凸面 凹面 色調	繩印き目 (縦位) 布目 (6×6) ナ ダ 色調 黄白色 硬質 最大厚2.2cm	C-3区 1層	写真図版15-5 平瓦 14		
-2 * 凸面 凹面 色調	繩印き目 (縦位) 糸切り縫・布目 (7×7) 一部ナ ダ 色調 黄白色 硬質 最大厚2.5cm	C-3区 1層	写真図版15-6 平瓦 19		
-3 * 凸面 凹面 色調	繩印き目 (縦位) 布目 (10×10) 一部ナ ダ 色調 黄白色 硬質 最大厚1.8cm	1号溝 理 土	写真図版15-7 平瓦 6		
-4 * 凸面 凹面 色調	繩印き目 一部自然縫 糸切り縫・布目 (7×7) 自然縫 色調 黄色 硬質 最大厚1.5cm	1号土塙 3層		写真図版15-7 平瓦 7	
-5 * 凸面 凹面 色調	繩印きの後ナ ダ消し 一部自然縫 糸切り縫・布目 (7×7) ナ ダ 色調 黄白色 硬質 最大厚3.0cm	1号溝 理 土	写真図版15-7 平瓦 18		

回観番号	種類	特徴	遺地	構区	備考
15-6	平瓦 5種類	凸面 繩引き（縦位・斜行）の後一部ナデすり消し 凹面 布目（8×8）の後、縦位のナデ 色調 黒色 硬質 最大厚2.5cm	表	探	写真図版15-8 (整理番号)平瓦31
16-1	丸瓦 1種	凸面 格子叩き目（斜格子） 凹面 系切り痕？ 布目質 ナデ 縦位の条痕 色調 褐色に灰白色 硬質 断面色調青灰色に褐色が抜む 最大厚2.3cm	1号上層		写真図版16-1
-2	*	凸面 格子叩き目 凹面 布目（8×8） 布縫い合わせ目 色調 灰白色 硬質 最大厚2.4cm	1号溝		
-3	丸瓦 2種	凸面 平行叩き目（横位・斜行） 凹面 系切り痕 布目（10×10） 縦位のナデ 色調 黒色 硬質 最大厚1.6cm	1号土壤		写真図版16-2
-4	*	凸面 平行叩き目（縦位・横位・斜行） 幅4cm程の単位 凹面 系切り痕 布目（11×11） 色調 淡黄褐色 やや軟質 狹端部1cm 最大厚1.6cm	1号土壤		写真図版16-3
-5	*	凸面 平行叩き目（縦位） 全面ナデ 凹面 系切り痕 布目（10×10） 布縫い合わせ目 縦位のナデ 色調 灰白色 硬質 最大厚1.9cm	1号土壤		写真図版16-5
17-1	*	凸面 平行叩き目（縦位） 凹面 系切り痕 布目（11×11） ナダ 色調 淡黄褐色 やや軟質 最大厚1.8cm	1号土壤		写真図版16-4
-2	丸瓦 3種類	凸面 全面縦位方向のナデ 凹面 系切り痕 布目（11×11） ナデ 色調 黑白色 硬質 最大厚1.5cm	1号土壤		写真図版16-6
3	丸瓦 4種類	凸面 繩叩きの後全面ナデすり消し 底端部付近に条痕 一部自然輪 凹面 精工絞痕 布目（7×7） 布縫い合わせ目 色調 黑色 硬質 最大厚1.6cm	1号土壤		写真図版16-7
-4	*	凸面 繩叩き（縦位）の後全面ナデすり消し 凹面 布目（9×9） 色調 灰色 硬質 最大厚1.5cm	1号土壤		
-5	*	凸面 繩叩きの後 縦位方向のナデすり消し 凹面 布目（7×7） 工縫との接合部に条痕 下縫 邵羅認 色調 黑色 硬質 最大厚1.8cm	1号土壤		
18-1	土師器 甕	外面 口縫部外傾気味 体部 ロクロナデ 薄部一回転側面切り無調整 内面 黒色処理 11縫～体部一横位方向のヘラミガキ 色調 黄褐色 推定口径14.9cm 底径0.1cm	1号七層		写真図版17-1
-2	*	外面 口縫部外傾気味 体部 ロクロナデ 切り離し不明 内面 黒色処理 口縫～体部一横位方向のヘラミガキ 底部-放射状のヘラミガキ 色調 黄褐色 推定口径13.9cm 底径6.9cm	1号土壤		写真図版17-2
-3	*	外面 体部 ロクロナデ 切り離し不明 内面 黒色処理 11縫～体部一横位方向のヘラミガキ 色調 黄褐色 推定口径13.5cm 底径6.3cm	1号土壤		
-4	*	外面 体部 ロクロナデ 切り離し不明 内面 黒色処理 色調 黄褐色 口径13.4cm 底径6.3cm	1号土壤		
			5層	土師器甕	17-3

写真番号	種類	特徴	遺地	構造区	備考
18-5	土師器 环	外面 体部一ロクロナダ 底部一河越ヘラケヌリ 内面 黒色処理 口縁一体部 横位方向のヘラミガキ 色調 黄褐色 椎底口径14.5cm 底径6.4cm	1分土壤	写真回版17-3	
-6	*	外面 体部一ロクロナダ 切り離し不明 内面 黒色処理 口縁一体部 横位方向のヘラミガキ 色調 黄褐色 口径13.4cm 底径5.1cm	1分土壤		
-7	*	外面 体部一ロクロナダ 切り離し不明 内面 黒色処理 口縁一底部 横位方向のヘラミガキ 色調 黄褐色 口径14.3cm 底径6.9cm	1号上塗	写真回版17-4	
-8	須恵器 环	外面 ロクロナダ 底部一河越系切り無蓋(右回り) 内面 ロクロナダ 色調 黄褐色 口径14.6cm 底径6.0cm	1号上塗	写真回版17-6	
-9	須恵器 袋	口縁部 おりかえしこなり; 1唇部は三角形を呈する 外面 丸輪な3条の波状沈殿 内面はけクチナダ 色調 黄色 最大厚1.5cm	1分土壤	写真回版17-7	
-10	*	頸部 外面 平行叩き目 ロクロナダの後に4条の波状沈殿 内面 ロクロナダ 色調 黄色 最大厚1.5cm	C-3区 I 層	写真回版17-8 須恵型1	
-11	*	頸部 外面 ロクロナダ 4条の波状沈殿と横位方向の3条の波状沈殿 内面 ロクロナダ 色調 黄色 最大厚1.4cm	C-3区 I 层	写真回版17-9	
-12	*	体部 外面 平行叩き目 内面 横枝状のオサエ 色調 黄色 石英粉を含む 最大厚1.1cm	B-4区 I 层	写真回版17-10 須恵型2	
19-1	*	体部 外面 平行叩き目 内面 横枝状のオサエ 色調 黄色 図18-12と同體と寄せられる	C-3区 T 层	写真回版17-10 須恵型30	
-2	*	体部 外面 平行叩き目 格子状のオサエと同心円文のオサエ 色調 外面 黑褐色 内面 赤褐色 最大厚0.9cm	1分土壤 埋土		須恵型27
-3	*	体部 外面 平行叩き状であるがつなぎが認められ格子を呈する 内面 平行叩き目 色調 黄色 最大厚1.7cm	1分土壤 2 层		須恵型33
-4	石 壺	刃部 両面より研がれています 最大厚0.7cm 底質骨製	1分土壤 埋土		写真回版17-14
-5	石 製品	径1.6cmほどの円筒で腐製品 いくらく中幅み 最大厚0.5cm 周縁は両面より磨かれ中央部に棱 鋸0.4cm 研玉製	1分土壤 底面		写真回版17-15

写真回版番号	種類	特徴	遺地	構造区	備考
17-5	土師器 环	口縁部のみ 外面 ロクロナダ『京』の墨跡 内面 黒色処理 横位方向のヘラミガキ	1分土壤 埋土		
-11	灰釉陶器 壺	口縁部のみ 口縁部「く」の字に外側 外面 色調 黄白色 内面に茶系色の釉	1分土壤 埋土		
-12	灰釉陶器 皿	底部のみ 外面 ロクロナダ・ヘラケヌリ 色調 黄白色 内面に灰色系の釉	1号溝 埋土		
-13	灰釉瓦器 瓶?	全体のみ 外面 ロクロナダ 黄緑系の釉 ハケ痕り 内面 ロクロナダ	溝状遺構 埋土		
-16	石 瓶?	周縁 刻離試験 基部は丸味をねびる 断面は菱形を呈する 長さ3.9cm 幅1.3cm 埋石製	T 层		

職員録

社会教育課
課長 水野昌一
主幹 幸坂春一
文化財管理係
係長 鈴木昭三郎
主幹 鈴木高文
(10月1日異動)
主事 山口宏
渡辺洋一
文化財調査係
係長(兼) 幸坂春一
教諭 佐藤隆
渡辺忠彦
佐藤裕
加藤正範
主事 田中則和
結城信一
成瀬茂
教諭 青沼一民
主事 郷沢みどり
木村浩二
篠原信彦
佐藤洋
金森安孝
佐藤申二
古川雅平
工藤哲司
渡部弘美
主浜光朗
斎野裕彦
長島栄一
荒井格
臨時職員 高橋勝也

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物墨屋ドセコイヤ化石林調査報告書(昭和39年4月)
仙台城(昭和42年3月)
第3集 仙台市燕沢窓寺横穴古墳群調査報告書(昭和43年3月)
史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書(昭和44年3月)
第5集 仙台市南小泉法隆寺古墳群調査報告書(昭和47年8月)
第6集 仙台市荒巻五木松窓跡発掘調査報告書(昭和48年10月)
第7集 仙台市高沢裏町古墳発掘調査報告書(昭和49年3月)
仙台市向山寺古墳群発掘調査報告書(昭和49年5月)
第9集 仙台市根岸町奈井寺横穴群発掘調査報告書(昭和51年3月)
第10集 仙台市中川町安久東遺跡発掘調査概報(昭和51年3月)
史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報(昭和51年3月)
第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報(昭和52年3月)
第13集 南小泉遺跡一帯周辺認定調査報告書(昭和53年3月)
第14集 宮城跨段跡発掘調査報告書(昭和54年3月)
史跡遠見塚古墳と53年度環境整備予備調査概報(昭和54年3月)
第16集 六反出雲跡発掘調査(第2・3次)のあらまし(昭和54年3月)
第17集 北星歌跡(昭和54年3月)
第18集 桥江遺跡発掘調査報告書(昭和55年3月)
第19集 仙台市地下鉄開通分布調査報告書(昭和55年3月)
第20集 史跡遠見塚古墳と54年度環境整備予備調査概報(昭和55年3月)
仙台市開発関係跡調査報告書1(昭和55年3月)
第22集 稲ヶ峯(昭和55年3月)
年報1(昭和55年3月)
第24集 今泉城跡発掘調査報告書(昭和55年8月)
第25集 二神寺跡発掘調査報告書(昭和55年12月)
第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報(昭和56年3月)
史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報(昭和56年3月)
第28集 年報2(昭和56年3月)
第29集 郡山遺跡I・昭和55年度発掘調査概報(昭和56年3月)
第30集 山田上ノ台跡発掘調査概報(昭和56年3月)
第31集 仙台市開発関係跡調査報告書II(昭和56年3月)
第32集 開ノ巣遺跡発掘調査報告書(昭和56年3月)
第33集 山上ノ台跡発掘調査報告書(昭和56年3月)
第34集 六反山遺跡発掘調査報告書(昭和56年12月)
第35集 南小泉跨跡都市計画道路建設工事関係第1次調査報告(昭和57年3月)
北前道路(昭和57年3月)
第37集 仙台平野の遺跡群I(昭和57年3月)
第38集 郡山遺跡II・昭和56年度発掘調査概報(昭和57年3月)
燕沢遺跡発掘調査報告書(昭和57年3月)

仙台市文化財調査報告書第39集

燕沢遺跡発掘調査報告書

昭和57年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1
仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町21-24 TEL 63-1166

